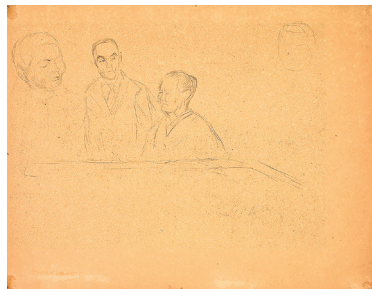
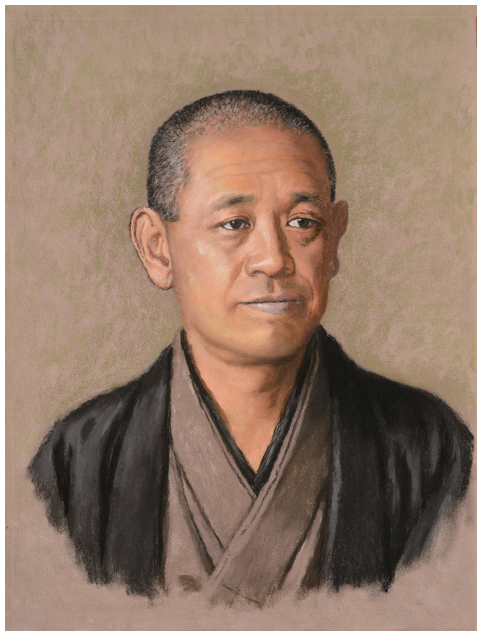




① 鈴木三郎《佐野新田争議》
1930年頃 油彩・スケッチ板 33.0 × 23.8cm



② 制作者不明《小林多喜二の屍?》表・裏
制作年不明 コンテ・紙 29.5 × 37.9cm



③ 矢崎千代二《大原孫三郎肖像》
1936年 パステル・紙 60.8 × 45.8cm



④ 制作者不明《大原孫三郎肖像》
制作年不明 パステル・紙 60.5 × 45.5cm
個人蔵

大原社会問題研究所が所蔵する 絵画資料について

中村 美香・藤原 千沙

はじめに

- 1 手当てを依頼した絵画資料一覧
- 2 大原孫三郎の肖像画について
- 3 高田愼吾の肖像画について

おわりに

はじめに

法政大学大原社会問題研究所では現物資料として絵画を所蔵しているが、図書資料および原資料の収集・整理・保存を中心に行ってきたため、絵画資料については十分に把握してこなかった。このたび『大原社会問題研究所雑誌』にて文化芸術分野の特集を組むにあたり、研究所が所蔵している絵画のうち応接室および貴重書庫に保管している絵画の状態を把握し、長期の保存に必要な手当てを施した。また当該絵画を所蔵するに至った経緯について調査を行った。本稿は、これらの絵画について得られた情報と施した手当ての内容について報告するものである。

法政大学多摩キャンパス図書館・研究所棟5階に立地する大原社会問題研究所の応接室の壁には、研究所を支えた大原孫三郎、高野岩三郎、久留間鮫造、森戸辰男、櫛田民蔵の肖像画がソファを挟んで向かい合うようにかけられている。応接室にはその他に農民とおぼしき人物を描いた絵が1枚あった。貴重書庫には複数の絵画が包装紙や緩衝材にくるまれて書架と保管棚の間に立てかけられていた。それらの絵画に関する情報を記録した事務ファイル等は存在せず、絵画をくるんだ包装紙、絵画の裏面、絵画と額の間にかけていた紙に記されていた情報、絵画と額の隙間に挟まれていた新聞紙などから、受け入れの経緯や時期に関する情報を取得した。以下第1節は中村、第2・3節は藤原が執筆を担当した。

1 手当てを依頼した絵画資料一覧

今回、絵画修復業者に手当てを依頼した絵画資料の一覧は表1のとおりである。作者の情報および所蔵の経緯など、現時点で判明していることを紹介する。

表1 絵画修復業者に手当てを依頼した絵画資料

	制作者	サイズ (縦×横 cm)	サイン, 制作年	描画材料/支持体, 状態	依頼内容
佐野新田争議	鈴木三郎	33.0 × 23.8	なし	・油絵具/スケッチ板 ・絵の裏面に貼り付け紙(文字)あり ・挟み込み紙(文字)あり ・応接室に掲示	・額の修理 ・絵の額への固定 ・保存箱作成
小林多喜二屍?	不明	29.5 × 37.9	なし	・コンテ/洋紙 ・当て紙に貼り付けられている ・裏にも絵が描かれている	・当て紙をはがして情報を取得する ・ブックマット作成 ・保存箱作成
大阪新開地 (合作)	高野岩三郎・ 矢崎千代二	60.1 × 90.1	地名を示す標木の側面に縦書きで「新開地 高野岩三郎」(墨書) その前の立て札に横書き・二段書きで「ヤザキチヨジ」[13.7.17]	・パステル・水性絵具/洋紙 ・墨で輪郭を描いた上に着彩している ・額縁のレリーフ部分に浮き上がり剥落あり ・右辺下側に左右方向の破れがある ・作品の上下に補強のための当て紙あり ・額の裏板(内側)に「矢崎千代二画伯及び高野岩三郎博士の共同労作になる本画面は昭和十三年七月十九日高野博士渡欧記念として両氏より本會館に寄贈せられたるもの也 森戸生」と墨書あり	・破損の修復 ・額縁新調 ・ガラスを紫外線防止のものに取り換える ・保存箱作成
高野房太郎肖像	矢崎千代二	45.4 × 33.1	画面右下に横書きで「C.YAZAKI」	・パステル/洋紙 ・作品の周囲に狭い間隔でピン穴あり ・額装は当時のもの ・額には『東京朝日新聞』昭和13年7月1日発行の4枚を額サイズに切ったもの、および台紙にパラフィン紙を貼り付けたものが挟まれていた	・額の修理, 紐の交換 ・絵の額への固定 (ガラスと作品の間にスペーサーを入れる) ・保存箱作成
久留間鮫造肖像	中村哲	45.4 × 38.0	画面右上に横書き・二段書きで「A.Nakamura」[1968]	・油絵具/画布 ・応接室に掲示	ガラスを紫外線防止のものに取り換える
森戸辰男肖像	村上桃二	53.0 × 45.5	画面右下に横書きで「M.murak」	・油絵具/画布 ・応接室に掲示	ガラスを紫外線防止のものに取り換える
高田愼吾肖像	矢崎千代二	45.3 × 33.3	画面左下に横書き・二段書きで「C.YAZAKI」[1934]	・パステル/洋紙 ・表面に汚れ, 像主の額の部分に, 擦れたような跡あり ・額は当時のもの(彫りが比較的立派な額縁, ガラスなし) ・額の裏板(黄ボールのような材質)に, 赤鉛筆で「大阪天王寺区俗人町大原社會問題研究所 高野岩三郎様行」と宛名あり ・裏板は反っている ・調査時, 額の裏の汚れを払った	・額の修理 ・絵の額への固定 ・紫外線防止アクリルをつける
榊田民蔵肖像	矢崎千代二	45.3 × 33.3	画面左下に横書き・二段書きで「C.YAZAKI」[1935]	・パステル/洋紙 ・用紙の色が表と裏で異なり(表面が明るい)表側の縁の部分が裏面と同じ色であることから, 紙やけしたものと思われる ・応接室に掲示	・額の修理 ・絵の額への固定 ・ガラスを紫外線防止のものに取り換える
高野岩三郎肖像	矢崎千代二	61.1 × 45.3	画面右下に縦書きで「一九三三 矢崎千代二」	・パステル/洋紙 ・応接室に掲示(簡易な額に取り替え済み)	ガラスを紫外線防止のものに取り換える
高野岩三郎肖像	矢崎千代二	60.8 × 46.0	画面左下に縦書きで「一九三四 矢崎千代二」	・パステル/洋紙 ・右辺上部に小さな破損あり	・クリーニング ・破損の修復 ・ブックマット作成 ・保存箱作成

	制作者	サイズ (縦×横 cm)	サイン, 制作年	描画材料/支持体, 状態	依頼内容
大原孫三郎肖像	矢崎千代二	60.8 × 45.8	なし	<ul style="list-style-type: none"> ・パステル/洋紙 ・支持体がテープで額に固定されている ・用紙の裏面に大原像の着物の部分が裏移りしている ・裏面には、木炭紙のような縦横の漉き目がある ・応接室に掲示（簡易な額に取り替え済み） 	<ul style="list-style-type: none"> ・支持体のテープを外して額に固定する ・ガラスを紫外線防止のものに取り換える

注) 矢崎千代二の作品の状態把握は横田香世氏および降旗千賀子氏に協力をいただいた(2023年3月9日)。

佐野新田争議 (巻頭vi頁①)

佐野新田争議とは、1930年から1931年にかけて、東京府南足立郡東淵江村佐野新田（現東京都足立区佐野）で起こった小作争議である。研究所では戦前期原資料として、同争議に関する資料（農13-1）を所蔵している。この作品は鈴木三郎⁽¹⁾作の油絵で、研究所の応接室に飾られていた。画板の裏に貼り付けられた紙片には次の記載がある。

農民運動史資料 全農東京府連 佐野新田争議（昭和5年？）共同耕作の図
 農民300人（千葉県連東葛からの応援をふくむ）と警官100人（千住署）の対峙、抜剣と鋤との打合い寸前に抑制し交渉に入った
 組合書記 玉橋女史 検束され奪還闘争になった
 この絵の作者 鈴木三郎君は『農民闘争』社⁽²⁾の同志、その後結核で死亡。
 （伊東三郎氏⁽³⁾より贈らる 1960 大島清⁽⁴⁾）

この作品は、作者・鈴木三郎の死後、1951年に市川義一氏より稲岡進氏⁽⁵⁾に贈られ、その後、伊東三郎氏によって大島清の手にわたり、1969年の大原社会問題研究所主催の展示『社会運動の半世紀——圧制と民衆の抵抗』でこの絵画が展示された。同展示で絵画をみた稲岡氏と大島が話し

-
- (1) 鈴木三郎（1904-1950）。神戸市で生まれ、関西学院高等学部卒業後に上京し、全農全国会議の書記局に属した。農民運動などに参加しながら制作活動を行い、二科会に出品するなどの実績を残すも、45歳で病死した。三思録刊行会『三思録 故鈴木三郎君の思い出集』1957年。
- (2) 『農民闘争』は全国農民組合（全農）の左派勢力の機関誌。1930-1932年刊行。研究所では『農民闘争』とともに、農民闘争社関係資料（1ファイル）を所蔵している。
- (3) 伊東三郎（1902-1969）。1930年ごろに共産党入党後は農民運動を指導し、『農民闘争』の編集にあたった。治安維持法違反で2度入獄し、戦後はエスパーント教育活動に従事した。伊東三郎、全農左派については以下の論文に詳しい。横関至「全農全会派の解体——総本部復帰運動と共産党多数派結成」『大原社会問題研究所雑誌』625号、2010年11月。同「左派」農民運動指導者の戦中・戦後——旧全会派の場合」同632号、2011年6月。
- (4) 大島清（1913-1984）。専攻は農業経済学。1949年法政大学経済学部の助教授となり、同年大原社会問題研究所の研究員に就任し、1952年には法政大学経済学部教授となった。その後、法政大学理事となり、1968年から1980年までの間で3度、大原社会問題研究所の所長をつとめた。また伊東三郎とは1955年に農村問題懇談会をたちあげ、『会報』を発行した。大島氏の著書には同絵画について記されており、佐野新田争議の絵の裏に貼られた紙片に絵の説明の文章を書いたのは伊東氏だという（大島清『人に志あり』岩波書店、1974年、311頁）。
- (5) 稲岡進（1905-?）。1930年に農民闘争社に入り、『農民闘争』1巻7号（1930.10）から2巻2号（1931.5）の編集兼発行人をつとめた。稲岡進「伊東三郎の思い出」渋谷定輔・埴谷雄高・守屋典郎編『伊東三郎 高く たくく 遠くの方へ——遺稿と追憶』1974年、土筆社、385-389頁。

合い、この絵画は大島個人の所蔵とせず研究所で所蔵することになった⁽⁶⁾。大島はこの絵を「共同耕作の図であり、実力行使にふみきった農民たちのたたかう一瞬をとらえた作品」⁽⁷⁾と記している。

大原社会問題研究所には鈴木三郎関連資料として、鈴木氏の死後につくられた回顧録『三思録』と、富沢実氏⁽⁸⁾、鈴木氏の妻・春代夫人、稲岡進氏から大島に送られたこの絵に関するはがきが残されている（すべて大島清より受贈）。

小林多喜二⁽⁹⁾の屍？（巻頭vi頁②表・裏）

研究所の貴重書庫に置かれていた複数の絵画のうちの1枚である。絵をくるんでいた紙に「小林多喜二の屍？」と油性ペンで書かれている。今回の修復において、当て紙に糊付けされていた絵をはがして絵の裏面に情報が書かれていないか確認したところ、裏面にも人物が描かれていたことが判明した。

小林多喜二の遺体の写真は何枚か残されているが、『時事新報』の記者であった笹本寅がカメラマンに撮らせた1枚にこの絵の表面と似た構図のものがある⁽¹⁰⁾。この絵は、その写真を見て描かれたと推測することもできるが、裏面の人物画と同じ構図の写真はなく⁽¹¹⁾、多喜二の遺体を見た人物がその場で描いたものである可能性がある⁽¹²⁾。絵にはサインなどの情報がなく制作者は不明であり、研究所がこの絵を所蔵した経緯も記録に残されていない。

大阪新開地（合作）（巻頭v頁③）

高野岩三郎と矢崎千代二が合作したパステル画の作品である。本誌掲載の横田香世論文が「大阪新開地」の場所と「合作」の意味を読み解いており参照されたい。この絵画は、貴重書庫の書架と保管棚の間に、他の絵画とともに立てかけられていた。この絵が包まれていた包装紙の表には油性ペンで「矢崎千代二・高野岩三郎の労作」と書かれている。絵の表面に10cmほどの破損が見つかり、今回修復を行った。また、額縁の石膏レリーフ部分に浮き上がり剥離が生じており、修理して使用できるよう業者に手当てを依頼したが、修理してもさらに剥落する恐れがあるとの指摘を受

(6) 前掲大島清『人に志あり』309-312頁に詳しい。

(7) 前掲大島清『人に志あり』310頁。

(8) 富沢実（1909-1994）。全国農民組合全国会議のメンバー。

(9) 小林多喜二（1903-1933）。『蟹工船』などの作品を発表し、日本のプロレタリア文学を代表する小説家となるが、不敬罪や治安維持法違反で入獄と釈放を繰り返し、最後は特別高等警察に逮捕され死亡した。

(10) 伊藤純「資料紹介 昭和前期の図像学——ガラス乾板から浮かび上がる群像」占領開拓期文化研究会『フェンスレス』オンライン版第3号、2015年、59頁。

(11) 前掲・伊藤純論文58頁には、多喜二の遺体を囲む人々の写真2枚が掲載されているが、いずれもこの絵と同じ構図ではない。

(12) 前掲・伊藤純論文58頁に掲載されている2枚の写真から推測すると、向かって右手は多喜二の母・小林セキ、真ん中は江口渙、左手が弟・小林三吾ではないかとみられる。立本紘之・法政大学大原社会問題研究所兼任研究員によると、多喜二の遺体のもとに集まった人々のなかでデッサンを残した可能性があるのは、画家の岡本唐貴と八島太郎（岩松惇）であるという。ともに多喜二のもとに駆け付け、デスマスクを描いた。岡本唐貴『日本プロレタリア美術史』造形社、1972年、67-68頁。宇佐美承『さよなら日本——絵本作家・八島太郎と光子の亡命』1981年、晶文社、130頁。

けて、額を新調し、制作時の額は保存することとした。

絵の裏面にはガムテープで茶封筒が貼り付けられていた。封筒の表面には「矢崎千代二画伯の絵画についての資料係御子柴啓子⁽¹³⁾の説明書」と書かれており、封入されていた便箋1枚には以下の情報が記載されていた（1999年2月3日付）。

1998.11.27 松川ゆか（森戸辰男氏遺族）氏より森戸辰男関係資料の寄贈を受ける⁽¹⁴⁾。矢崎千代二画伯絵画汚損が甚だしく保存についてキャット⁽¹⁵⁾の木部氏に相談。絵画面をねりゴム消でほこりをとり台のベニヤとの間に中性紙を入れて保存するのが一番良いだろうとのことであったが、ねりゴム消でたたくと色が（パステル画のため）全部移ってしまいよくない。ほこりをモップで払い、中性紙をあてルミラー⁽¹⁶⁾で包み額に戻した。

高野房太郎⁽¹⁷⁾の肖像画（本誌49頁図版4）

1888年5月にサンフランシスコで撮影された高野房太郎の写真をもとに、弟・高野岩三郎の依頼で矢崎千代二が制作したパステルの肖像画である。岩三郎は、兄・房太郎の肖像画の制作を母・マス、父・仙吉の肖像画とともに矢崎に依頼した（本誌横田論文参照）。父母の肖像画もかつては研究所が所蔵していたとされるが⁽¹⁸⁾、2023年1月～2月にかけて研究所内を探したが見当たらず所在不明である。この肖像画は貴重書庫に保存されていたが、額に固定されていなかったため、額への固定と専用の保存箱の作成を行った。

久留間鮫造⁽¹⁹⁾の肖像画（図版1）

法政大学総長をつとめた中村哲⁽²⁰⁾作の油絵で、研究所の応接室に飾られていた5点の肖像画の

(13) 御子柴啓子は1992～1999年に研究所資料係として勤務した法政大学職員。

(14) 『大原社会問題研究所雑誌』484号（1999年3月）掲載の1998年11月所報には、11月27日「松川ゆか氏より森戸辰男関係資料（矢崎千代二画伯絵画他）段ボール5箱受贈」とある。

(15) CAT（Conservation And Technologies）を指すと思われる。現在の株式会社資料保存器材。

(16) 東レ株式会社が販売しているポリエステルフィルムの商標名。

(17) 高野房太郎（1869-1904）。10歳で父を亡くし戸主となり、13歳で奉公に出て夜学に通い、家族を支える収入を求めて17歳で渡米した。さまざまな仕事に就きながら日本へ仕送りをして母の商売や弟の学費をたすけた。1891年にサンフランシスコで日本の労働組合運動の源流となる職工義友会を創立し、1896年に帰国後、翌年に職工義友会を再建し、労働組合期成会を設立した。生活協同組合運動にも貢献したが、35歳で病のため死去した。二村一夫『労働は神聖なり、結合は勢力なり——高野房太郎とその時代』岩波書店、2008年等を参照。

(18) 前掲二村一夫『労働は神聖なり、結合は勢力なり』2頁に父・仙吉の肖像画は研究所所蔵とある。同3頁にある母・マスの写真は著者所蔵とあるが、この写真と類似した構図の肖像画が研究所の地下書庫に保存されていたとされる（二村一夫・法政大学大原社会問題研究所名誉研究員への聞き取りによる）。

(19) 久留間鮫造（1893-1982）。1918年東京帝国大学法科大学を卒業し銀行勤務を経て1919年に大原社会問題研究所創立とともに研究員となる。1920年から約2年間欧米に渡り研究所の図書を集めた。敗戦後は1946年に法政大学経済学部教授となり、翌年には研究所の常務理事となって戦後の再建につとめた。1949年の法政大学と大原社会問題研究所の合併をまとめ、1949年から1966年まで研究所の所長をつとめた。1964年に法政大学を退任し、研究所の所長も退任した後は、名誉研究員、研究嘱託として『マルクス経済学レキシコン』の編集に専念した。

(20) 中村哲（1912-2003）。法学・政治学者で1968年から1983年までの15年にわたり法政大学の総長をつとめた。江戸時代の文人画家浦上玉堂の子孫であり、画家としても作品を残した。中村哲「わが祖浦上玉堂」『わが学芸の先人たち』法政大学出版局、1978年、41-77頁参照。

うちの1枚である。中村は、法政大学経済学部の教授でもあった久留間を尊敬し、その肖像を何枚か描いた⁽²¹⁾。そのなかの1点を大原社会問題研究所が多摩キャンパスに移転した直後に寄贈したとされ⁽²²⁾、現在でも応接室に飾られている。

森戸辰男⁽²³⁾の肖像画（図版2）

森戸の大阪労働学校⁽²⁴⁾の教え子である村上桃二⁽²⁵⁾作の油絵である。村上は、恩師・森戸の肖像を描き、森戸の死後1985年に森戸家に贈呈した。絵の裏地には「恩師 森戸辰男先生像 1985.8.3 村上桃二 謹写」と油性ペンで書かれている。その後この絵は1989年に森戸辰男夫人・森戸富仁子氏から研究所に寄贈された⁽²⁶⁾。

高田慎吾⁽²⁷⁾の肖像画（図版3）

矢崎千代二が描いたパステル画で、高田の死亡後、研究所が矢崎に制作を依頼した作品である

(21) 中村哲「久留間先生と共に」法政大学大原社会問題研究所『研究資料月報』294号、1983年、6-8頁。

(22) 二村一夫名誉研究員からの聞き取りによる（2023年5月8日）。

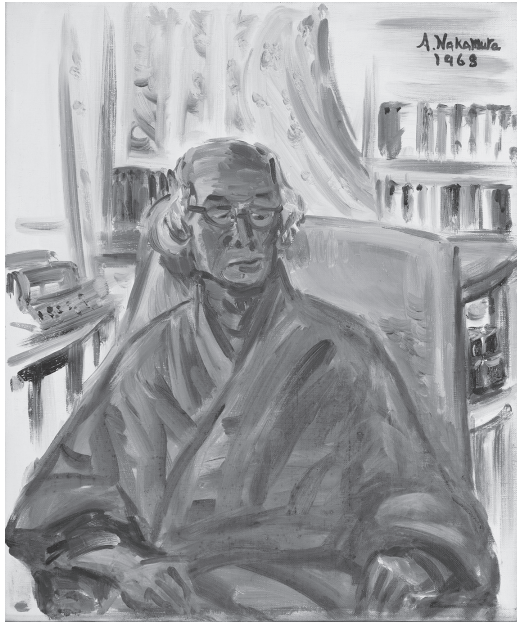
(23) 森戸辰男（1888-1984）。東京帝国大学法科大学経済学科で高野岩三郎に統計学を学び、助手から経済学科助教授となる。1919年12月下旬に第1巻第1号として有斐閣から発行された雑誌『経済学研究』（東京帝国大学経済学部内経済学研究会機関雑誌）に掲載した論文「クロボトキンの社会思想の研究」が、政体を変改し朝憲を紊乱するものとして雑誌が回収され、編集責任者だった大内兵衛とともに1920年1月起訴された。1920年10月大審院の上告棄却で有罪が確定し、東京帝国大学助教授は免官、東京監獄に収監された。出獄後は大原社会問題研究所の研究員となり、欧州に約2年間留学し、帰国後は多くの翻訳、調査研究、大阪労働学校の経営を担うなどして1947年まで研究員、理事をつとめた。敗戦後は衆議院議員となり片山・芦田内閣の文部大臣をつとめ、また広島大学学長（1950-1963）、中央教育審議会会長（1963-1971）などを歴任し教育界に影響を与えた。1959年から1980年まで労働科学研究所の理事長をつとめた。小池聖一『森戸辰男』吉川弘文館、2021年等を参照。

(24) 1922年に労働者教育を目指して賀川豊彦を校長に大阪で設立された学校。1924年には大原社会問題研究所の所長である高野岩三郎が経営委員として参加し、森戸辰男など研究所の所員が講義を担当するだけでなく経営にも尽力した。16年間続いたが、1937年開講の45期を最後に閉校した。森戸のほかにも多くの大原社会問題研究所関係者が講師その他で参画した。法政大学大原社会問題研究所編『大阪労働学校史——独立労働者教育の足跡』法政大学出版局、1982年等を参照。

(25) 村上桃二（1909-?）。18歳のときに父と兄を相次いで亡くし、貧困のため進学できず働きながら大阪労働学校に入学し、森戸辰男に師事して親交を結んだ。森戸の疎開先の家の娘を紹介され結婚した。村上桃二「私の大阪労働学校時代——貧困と苦闘のどん底にあった私の青春時代」前掲法政大学大原社会問題研究所編『大阪労働学校史』261-278頁。

(26) 二村一夫名誉研究員からの聞き取りによる（2018年7月25・27日、2022年12月13日、2023年7月7日）。『大原社会問題研究所雑誌』363・364号（1989年3月）に掲載された「座談会《政経ビル時代の思い出》——戦後初期の大原社研」で二村研究員が森戸に言及したことを受けて、富仁子夫人と村上桃二氏が研究所を訪れ、同絵画が研究所に寄贈されたという。なお、同雑誌370号（1989年9月）掲載の1989年5月号報には、5月9日「森戸辰男夫人、令息、同夫人来所」との記録があり、富仁子夫人は複数回来所している。

(27) 高田慎吾（1880-1927）。熊本県八代町に生まれ、東京私立青山学院中学部、熊本第五高等学校、東京帝国大学法科大学ドイツ法科を卒業後、東京市養老院に就職し児童部巣鴨分院にて社会事業に携わった。1912年から1913年にかけて渡米し児童保護や社会事業を学んだ後、内務省地方局救済課の囑託を経て、1918年大原孫三郎が設立した石井記念愛染園の救済事業研究室の主任に着任した。1919年2月の大原社会問題研究所・大原救済事業研究所の創立にかかわり、両研究所の合併後は幹事・理事として研究所を支えた。47歳で死去後、研究所は高田が生前に遺した論稿を編纂し、高田慎吾『児童問題研究』（同人社書店、1928年）として出版した。



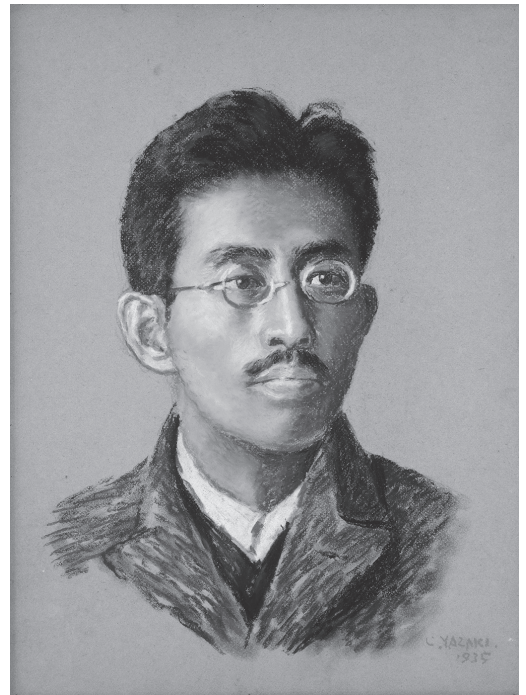
図版 1 中村哲《久留間鮫造肖像》
1968年 法政大学大原社会問題研究所蔵



図版 2 村上桃二《森戸辰男肖像》
1985年 法政大学大原社会問題研究所蔵



図版 3 矢崎千代二《高田慎吾肖像》
1934年 法政大学大原社会問題研究所蔵



図版 4 矢崎千代二《柳田民蔵肖像》
1935年 法政大学大原社会問題研究所蔵

（本誌横田論文参照）。額に入れた形で貴重書庫に保存されていたが、支持体（紙）が額に固定されていなかったため、額への固定を行い、掲示用に低反射・紫外線防止・帯電防止アクリルを取り付けた。この肖像画に関しては第3節でとりあげる。

櫛田民蔵⁽²⁸⁾の肖像画（図版4）

高田と同様、矢崎千代二の手によるパステル画で、櫛田の死亡後、高野岩三郎が矢崎に制作を依頼した作品である（本誌横田論文参照）。作品は額に釘を打つ形で固定され、応接室に飾られていた。今回の修復では錆びた釘を取り外し、新たな形で額への固定を依頼した。また紫外線による紙やけが見られたため、ガラスを低反射・紫外線防止・帯電防止アクリルにした。この作品だけでなく応接室に飾る他のパステル画も同様に交換した。

高野岩三郎⁽²⁹⁾の肖像画2枚（1933年、1934年）（本誌44頁図版1・図版2）

矢崎千代二のパステル画である。矢崎と交流のあった高野は、自身の肖像を2枚、矢崎に依頼した（本誌横田論文参照）。2枚とも研究所が所蔵しており、1枚は応接室に掲げ、1枚は貴重書庫に保管している。応接室に飾っている絵は、以前に額が破損したため新調しており、制作時からの額は残されていない。貴重書庫に保管している絵には額がなく、包装紙にくるまれて置かれていたため、このたび専用の保存箱を作成した。

大原孫三郎⁽³⁰⁾の肖像画（巻頭vi頁③）

矢崎千代二のパステル画である。応接室に飾っているほか、研究所パンフレットにも掲載している。高野岩三郎の肖像画と同様、額は新調されており、制作時からの額は残っていない。この肖像画に関しては次節でとりあげる。

(28) 櫛田民蔵（1885-1934）。福島県岩城郡に生まれ、東京外語学校、京都帝国大学、東京帝国大学大学院に学び、1913年に高野岩三郎の同大学経済統計研究室の助手となる。大阪朝日新聞の記者を経て、1920年に大原社会問題研究所の研究員となる。同年、海外に派遣され、ドイツを中心に研究所の図書を集めた。マルクス経済学にかかわる多くの論文を発表し、49歳で死去後、『櫛田民蔵全集』（全5巻、1935-36年、改造社）が刊行された。石河康国著『櫛田民蔵——マルクス探求の生涯』社会評論社、2021年等を参照。

(29) 高野岩三郎（1871-1949）。長崎県長崎市に生まれ、1895年東京帝国大学法科大学政治学科を卒業し、翌年桑田熊蔵らと社会政策の勉強会（翌年社会政策学会となる）を設立した。文部省の辞令による約4年間のドイツ留学後、1903年東京帝国大学法科大学教授に就任し、統計学の講座を担当する。1919年大原社会問題研究所の創立総会に参加し、同年第1回国際労働会議の労働者代表を受諾したが、後に撤回し、大学に辞表を提出した。翌年研究所の初代所長となり、研究所の基礎を築いた。敗戦後1945年に「日本共和国憲法私案要綱」を作成し、戦後の初代日本放送協会（NHK）会長（1946-1949年）に就任した。大島清『高野岩三郎伝』岩波書店、1968年等を参照。

(30) 大原孫三郎（1880-1943）。岡山・倉敷の資産家の家に生まれ、24歳で家督を相続して以降は、家業である倉敷紡績などの経営のかたわら、石井十次の開いた岡山孤児院を支援するとともに、大原奨農会（現岡山大学資源植物科学研究所）、大原社会問題研究所（現法政大学大原社会問題研究所）、倉敷労働科学研究所（現公益財団法人大原記念労働科学研究所）、倉敷中央病院を設立した。また倉敷に大原美術館をつくり民芸活動を支援するなど社会への富の還元、貢献を果たした。大原孫三郎傳刊行会編『大原孫三郎傳』中央公論事業出版、1983年等を参照。

2 大原孫三郎の肖像画について

大原社会問題研究所は1937年、大原孫三郎の支援から独立して自立経営の方針をもって東京に移転した。その告別の晩餐会の席上、大原の肖像画を贈呈したことが研究所の年史に記されている。

[1937年2月15日] 研究所主催の感謝と告別の晩餐会が新大阪ホテルにおいて開かれた。大原はじめ、河田嗣郎、飯島幡治その他数名が招待され、高野は矢崎千代二画伯の筆になる大原の肖像画を贈呈し、多年の援助を謝し、また大阪への告別の言葉を述べた⁽³¹⁾。

しかし大原の肖像画に関しては、その半年前の出来事として、次のような記録も残されている。

[1936年7月25日] 委員会散会后、高野所長は林の案内で大原を訪問、まず研究所に対する深い理解と多年の援助を厚く感謝する旨を述べ、終わって柿原の監事辞任申出について話し合った。また高野は大原に感謝の意を表するため肖像画を贈りたいと申し出たが、大原はこれを辞退した。こうして覚書を交換してこの会見は終わった。多年の懸案はようやくここに解決を見た⁽³²⁾。

大原が、研究所の廃止と資産処分を考慮していることは1928年に高野所長に伝えられ、その後、研究所の存廃をめぐる大原と高野の話し合いは、両氏の病気その他の事情で中断しつつも継続して行われていた。1936年に方針の一致をみて覚書を交わした席上、高野は大原に肖像画を贈りたいと申し出たが、大原は辞退したとされる。

現在、研究所は所内の応接室で大原孫三郎の肖像画を飾っているが、1937年の告別の晩餐会で大原に肖像画を贈呈していれば、研究所は保有していないはずである。大原は肖像画贈呈に関する高野からの申し入れを断っていたことを踏まえると、研究所の肖像画は大原から返されたものなのだろうか。晩餐会の席上で贈呈した肖像画がその後返却されたとするならば、研究所の存廃をめぐる長年の話し合いを経て、高野と大原の関係があまりよいものではなくなっていたことを想起させる。

しかし、そのような事実はなく、大原は高野からの肖像画贈呈の申し入れを受諾していた。本稿末の別表は、当時の研究所の事務日誌より、矢崎千代二にかかわる記述を抜き出したものである。これをみると、1936年9月29日および10月22日に所員の鷹津繁義が矢崎千代二を大原邸に案内したこと、10月30日には「大原氏肖像画二面揮毫謝禮」として200円を矢崎に支払ったことがわかる。大原は1936年7月に肖像画の贈呈を申し入れられた際はいったん辞退したものの、9月に

(31) 法政大学大原社会問題研究所編『大原社会問題研究所100年史』法政大学出版局、2020年（以下『100年史』）、110頁。法政大学大原社会問題研究所編『大原社会問題研究所五十年史』（法政大学大原社会問題研究所、1970年、以下『50年史』）103頁、法政大学大原社会問題研究所編『大原社会問題研究所三十年史』（法政大学大原社会問題研究所、1954年、以下『30年史』）125頁にも同内容の記述がある。

(32) 前掲『100年史』107頁。前掲『50年史』99頁、前掲『30年史』120頁にも同内容の記述がある。

は矢崎千代二を自宅に招き入れる形で肖像画の制作に協力していた。注目されるのは研究所会計の出納記録でもある事務日誌に「二面揮毫謝禮」と記されていたことである。研究所は矢崎に大原の肖像画の制作を2枚依頼していた。

では、2枚描かれた肖像画のうち、1枚はどこにあるのか。岡山県倉敷市で大原孫三郎・大原總一郎の事績を顕彰している公益財団法人有隣会に尋ねたところ、大原家には大原孫三郎の肖像画が何枚かあるが、矢崎千代二作とされる肖像画は存在しないとのことであった。ただし、制作者不明の肖像画が2枚あり、そのうち1枚は、研究所が所蔵している矢崎千代二の作品と類似しているとして写真を送っていただいた。同写真を矢崎千代二の研究者である横田香世氏に見てもらったところ、矢崎作品の可能性があると意見をいただいたことから、大原美術館の塚本貴之学芸員（作品保存・管理）に依頼して2023年2月16日に現地で作品調査をしていただいた。その結果、本誌横田論文（46頁注38）に記載のとおり、研究所が矢崎に依頼して大原に贈呈した肖像画である可能性が高まったことから、2023年4月11日に倉敷に出向き当該肖像画を実見した。巻頭vi頁④はその際に塚本貴之氏に撮影していただいたものである。

研究所所蔵の肖像画（巻頭vi頁③）と比べると、横田論文が指摘するように筆致に類似点が多く、着物姿や左向きの構図も同じである。同じ写真をみて描いたと推測できるほどだが、事務日誌に記されているとおり、矢崎が大原邸に出向いて大原氏と対面して描いたものである。倉敷の肖像画は収蔵庫に保管されていたからか、研究所の応接室に飾っている肖像画よりも、パステルの色が鮮やかであった。倉敷の肖像画が入れられている額には「大阪・心斎橋 河内洋画材料店」の銘板があり、掘りの深い彫刻が施されていた。倉敷からわざわざ大阪の画材店に額縁を発注することは考えにくく、この額も研究所があつらえたと推測しうる。画家のサインはなく断定はできないが、研究所が矢崎に依頼して制作した大原の肖像画2枚のうちの1枚であり、1937年2月15日に新大阪ホテルで開かれた告別晩餐会にて研究所が大原に贈呈したものと推定される。

3 高田愼吾の肖像画について

本誌掲載横田論文で記されているように、高野は画家・矢崎千代二に自身や関係者の肖像画の制作を依頼していた。1933年に制作した自身の肖像画に続けて1934年に依頼した像主は、1927年に死去した大原社会問題研究所の役員・高田愼吾である。

二村一夫名誉役員がかつて本誌で指摘していたとおり、高田愼吾は研究所104年の歴史のなかで最初に就任した第1号の専任役員である⁽³³⁾。高野岩三郎は1919年2月9日大原社会問題研究所創立総会に参加したものの、当時は東大教授であり、研究所の運営を中心的に担う立場ではなかった。高野は1919年10月に東大を辞職、1920年3月に所長に就任するが、所長就任の前には研究所の規定改正の原案を高田愼吾に送っており、高田が研究所の運営を事実上担っていたと思われる。大原は、高野を研究所の所長に推挙した会議において、高田を幹事に推挙しており、初代所

(33) 二村一夫「役員第1号」『大原社会問題研究所雑誌』362号（1989年1月）。

長となった高野岩三郎が率いる研究所は高田が高野を支える体制でスタートした⁽³⁴⁾。だが高田はその7年後47歳で早世し、高野のもとに東大経済学部から集まってきた研究員が研究所活動の中心となっていったことから、研究所の創設初期における高田の貢献は忘れられがちである。

高田慎吾の肖像画については研究所の事務日誌（69頁別表）にも記録が残されている。読解が悩ましいのは、高田の肖像画の揮毫料として研究所が矢崎に30円を支払った記録が2回出てくることである（1934年2月17日、1934年4月25日）。誤って二重に支払ってしまったのだろうか。あるいは別の肖像画の支払いと記載すべきところ庶務主任の鷹津繁義が誤って高田の分の支払いと事務日誌に記してしまったのだろうか。さらに、高野岩三郎が記していた日記（以下、高野日記⁽³⁵⁾）によると、翌年1935年2月9日、高野は矢崎に高田の肖像画の修整を依頼している。高野は何が気に入らなくて修整を依頼したのだろうか。この日記の記述が気に入り、絵画修復業者に手当てを依頼する際に修整部分を判別できるかどうか尋ねたが、パステル画で加筆や修整の跡を判別するのは難しいとのことであった。

当初はこのような疑問を抱いたものの、高田の肖像画が実際には2枚描かれていて、研究所が所蔵している絵画は修整されていない1枚であると仮定すれば、これらの疑問は氷解する。表2は事務日誌と高野日記の記述を時系列に並べたものである。ここから読み取れる事実から高田の肖像画の制作経緯を推察してみたい。

研究所が高田慎吾の肖像画を矢崎から受け取った日として明白なのは、1934年6月9日である。同日の事務日誌には、所員の中村勲男が「大阪港碇泊クライド丸」に出向いて「矢崎画伯委託故高田氏ノ肖像画一枚」を受け取ったと記されている。矢崎はジャカルタに滞在中で、船に頼んで肖像画を日本まで運んでもらっていた。1934年4月25日の事務日誌には、「故高田氏肖像画揮毫料」として30円を支払った記録があり、4月25日の支払いと6月9日の受け取りは明白である。

一方で、事務日誌によると、それ以前の1934年2月17日にも研究所は矢崎に「故高田ノ分」として肖像画の揮毫料30円を支払っていた。同日の高野日記には、矢崎が研究所に来所して高野の肖像を仕上げた際に、高野が矢崎に高田慎吾の肖像を30円で依頼したこと、矢崎は高野の依頼を快諾して「Java行ノ船中ニテ画カレ直チニ返送スベク約サル」ことが記されている。横田香世氏によると、矢崎は2月21日に石原汽船クライド丸で神戸港を出航して3月9日にバタヴィア（ジャカルタ）に到着した。矢崎はジャカルタに向かう船のなかで高田の肖像画を描いて直ちに返送すると高野に約束していたのであり、6月9日に研究所が受け取った肖像画がそれだとしたら、直ちに返送するとの約束から時間がたちすぎている。

そこで注目されるのは1934年4月9日の事務日誌で、所員の木村定が大阪港に出向いて「矢崎畫伯ノ委託品高野所長宛ノパステル画一枚」を受け取っていることである。そのパステル画が何かは記されていないが、2月17日に高野が依頼し、矢崎が船中で描いて直ちに返送すると約束した高田の肖像画であれば時期的に合致する。研究所は高田の肖像画を2回（1934年4月9日、1934

(34) 前掲『100年史』32頁。

(35) 高野日記は研究所Webサイトで公開しており閲覧することができる（法政大学大原社会問題研究所Webサイト>社会労働問題アーカイブス>高野岩三郎関連>高野岩三郎「日記」<https://oisr-org.ws.hosei.ac.jp/archives/itakano/diary/>）。

表2 高田慎吾の肖像画にかかわる記述

大原社会問題研究所「事務日誌」	高野岩三郎の日記（高野日記）
<p>【1934年2月17日（土）】 一、午後一時矢崎画伯来所所長ノ肖像画ヲ描ク 揮毫料所長ノ一枚分一〇〇、〇〇故高田ノ分三〇、〇〇計一三〇、〇〇ヲ渡ス、</p>	<p>【1934年2月17日（土）】 出所 [中略] 午後一時半ノ頃矢崎千代二君来ラル 書キ残シノ余ノ肖像ヲ仕上ゲラル、故高田慎吾君ノ肖像ヲ三十円ニテ依頼ス 快諾サル、Java 行ノ船中ニテ画カレ直チニ返送スベク約サル 余ノ乞ヒ受ケタル移民船ノ画面ノ礼トシテ二十円ヲ渡ス、四時過辭去サル、</p>
<p>【1934年4月9日（月）】 一、木村君大阪港碇泊クライド丸ニ出向キ矢崎畫伯ノ委託品高野所長宛ノパステル画一枚受取ル</p>	
<p>【1934年4月25日（水）】 一、故高田氏肖像画揮毫料三〇、〇〇支拂（矢崎画伯拂）</p>	
<p>【1934年6月9日（土）】 一、中村君大阪港碇泊クライド丸ニ出向キ矢崎画伯委託故高田氏ノ肖像画一枚受取ル、</p>	
	<p>【1934年7月26日（水）】 十一時出所 [中略] 高田不二夫人 故高田君ノ満七回忌ヲ熊本ニテ営マレタル帰途 今朝所へ来訪 拙宅ヲ訪ハレ、更ニ午後一時過来所サル、面会ス、且研究会ノ中途会議室ニ掲ケアル高田君ノ肖像ニ付批評ヲ求ム、一時間計リニテ辭去サル</p> <p>【1935年2月9日（土）】 正午出所 [中略] 矢崎千代二君へ高田君肖像ノ修整 榊田君肖像揮毫方依頼、</p>
<p>【1935年4月17日（水）】 一、矢崎畫伯来訪、高田、榊田両氏ノ肖像畫持參セラル、全畫伯作品繪ハガキ多数寄贈セラル、</p>	

注) 大原社会問題研究所の事務日誌（本稿末別表）と高野岩三郎の日記より関連する記述を抽出。

年6月9日）受け取っていたならば、事務日誌に揮毫料の支払い記録が2回（1934年2月17日、1934年4月25日）出てくることも整合する。

では、高田の肖像画が2枚描かれたとして、研究所が所蔵している絵はどちらのもので、もう1枚の絵はどこにあるのだろうか。研究所が所蔵している高田の肖像画は制作当時からの額に入っており、額の裏板には「大阪天王寺区俗人町 大原社会問題研究所 高野岩三郎様行」と赤鉛筆で記されていた。1934年4月9日の事務日誌には「矢崎畫伯ノ委託品」である「高野所長宛ノパステル画一枚受取ル」とだけ書かれており、何の絵かは記されていないが、この「高野岩三郎様行」という裏板の記述を正確に事務日誌に記したと考えられるのではないかと。だとしたら、4月9日に受け取ったパステル画が、現在、研究所が所蔵している高田の肖像画であると解釈できよう。

研究所はなぜ高田の肖像画をもう1枚制作したのだろうか。表2からわかるように、高野日記によると、1934年7月26日、亡高田の妻・高田不二が研究所を来訪している。そして高野は、所内の会議室に掲げた「高田君ノ肖像ニ付批評」を不二に求めた。高野はその半年後の1935年2月9日、帰国した矢崎に「高田君肖像ノ修整」を依頼している。この修整は、高野が肖像画を気に入ら

なかったからではなく、不二の批評に基づくものだったと考えられるのではないか。1935年4月17日の事務日誌には、矢崎が研究所に来訪し、「高田、櫛田両氏ノ肖像畫持參セラル」とあるが、この矢崎が持参した高田の肖像画は、修整後の肖像画である。修整後の高田の肖像画の行方は事務日誌にも高野日記にも記されておらず辿ることはできないが、1934年6月9日に受け取ったもう1枚の肖像画が不二の批評で修整され、1935年4月17日に再納品されたとするならば、その後は不二に贈呈されたとも考えられる。研究所が高田の肖像画を2枚制作したのも、完成した肖像画の批評を不二に求めたのも、当初から不二に贈呈することを考えてのことだったかもしれない⁽³⁶⁾。

前述したように、研究所の応接室には、大原孫三郎と高野岩三郎の肖像画のほか、久留間鮫造、森戸辰男、櫛田民蔵の肖像画を飾っている。だが高田慎吾の肖像画は貴重書庫に保管され、応接室には掲げていなかった。このことは、東京移転後、法政大学と合併した研究所において、大原孫三郎が研究所を設立した原点である社会事業や社会福祉の研究が重要視されていなかったことを物語る⁽³⁷⁾。高田慎吾は、東大教授だった高野所長のもとに集まってきた研究員とは異なり、大原孫三郎が当時の社会事業界の重鎮だった小河滋次郎に相談して自ら招聘した大原直系の研究員である。高田は大原の命を受けて暉峻義等を訪ね入所を誘うなど、大原が企図した研究所の創設を支えた。高野岩三郎も当時の研究員たちも、研究所に対する高田の貢献は十分に認識しており、高田の葬儀は研究所の「所葬」として所内の図書閲覧室で営まれた⁽³⁸⁾（図版5）。このたびの修復と手当てを機に、高田慎吾の肖像画も他の研究員と同様に応接室に掲げることとした。

(36) 高田の妻・不二に関しては、前掲・大島清『高野岩三郎伝』において、高野の古希祝賀会（1940年11月27日）の出席者として次のような記述がある。「出席者は権田、森戸、大内、久留間、細川、後藤、内藤、鈴木、木村など研究所関係者と、かつての所員たる林要、竹内謙三、河西太一郎、越智道順、高田不二子（故高田慎吾夫人）、山村喬、亀島泰治ら、また渡辺多恵子、佐多忠隆など旧研究生も顔を見せた」（373-374頁）。高田不二（不二子）は、夫の死後10年以上を経ても高野の古希を祝う会に参加していること、また「かつての所員」「旧研究生」とともに出席者として名前が記されていることから、不二自身が高野や研究所と直接つながりがあった可能性も考えられる。なお、高田慎吾は前妻を1919年に亡くし、妻が書き残した文芸作品を遺稿集として出版している（高田てい『犬と彼等』編集兼発行者高田慎吾、1919年、国会図書館デジタルコレクション）。前妻との死別や遺稿集の出版は、高田が石井記念愛染園に赴任して大原社会問題研究所の創立にかかわっていた時期であった。不二との再婚は1920年で、前掲・高田慎吾『児童問題研究』掲載の略歴では「鈴木ふじ子と結婚す」と記されている（360頁）。研究所に複数ある同書の1冊には「高田不二」の署名がある（宇野弘蔵宛献呈署名）。

(37) 1919年2月に「大原社会問題研究所」と「大原救済事業研究所」が創設され、その後2つの研究所が合併して「労働問題に関する研究部門」「社会事業に関する研究部門」を設置、高野の所長就任で2部門制は廃止された。研究所と社会事業とのつながりとその忘却の経緯について、藤原千沙「大原社会問題研究所と社会事業・福祉研究」『大原社会問題研究所雑誌』724号（2019年2月）参照。

(38) 研究所の所葬では、欧州滞在中で不在だった高野所長に代わり、研究所を代表して森戸辰男が弔辞を述べた。研究所が編纂して高田の死後に刊行した遺稿集（高田慎吾『児童問題研究』同人社書店、1928年）には、森戸のほか他の参列者による弔辞の一部が収録されている。高田の死を悼む声は社会事業界で大きく、財団法人中央社会事業協会『社会事業』11巻7号（1927年）では「故高田慎吾氏に対する諸家の追想」が収録されている。生江孝之の追想には「当時我が最高学府の卒業生で直ちに進んで社会事業に従事した人は未だ嘗てなかったので世人は驚異と嘆賞とを以て之を見たのである」と高田の経歴を振り返っている。他に大阪社会事業連盟『社会事業研究』15巻8号（1927年）でも高田の追悼記事が出され、16巻8号（1928年）にも高田の遺稿集刊行を記念する特集が組まれた。大阪社会事業連盟は、研究所の所葬の2日後（7月11日）、高田の追悼会を開催し、約百数十名が参列した（前掲『社会事業研究』15巻8号、38-41頁）。



図版5 高田慎吾告別式（研究所所葬，図書閲覧室，1927年7月9日）
法政大学大原社会問題研究所蔵

おわりに

本稿で紹介した作品は、研究所の応接室および貴重書庫に保管されていた作品にとどまり、研究所が所蔵している絵画の一部である。地下書庫にある向坂文庫や未整理資料のなかに何点かの絵画があることを確認しているが、一覧リストはなく、絵画の所蔵状況については十分に把握できていない。今回、修復と手当てを施した絵画については、これからも永く適切に所蔵していくために、貴重書庫に絵画専用の保存棚の新設を予定している。これからも引き続き調査をすすめ、絵画資料の状態確認と一覧の把握につとめたい。

（なかむら・みか 法政大学大原社会問題研究所研究業務補助員）

（ふじわら・ちさ 法政大学大原社会問題研究所教授）

【謝辞】 倉敷にある制作者不明の大原孫三郎肖像画については、公益財団法人有隣会の水島博氏に大原家との仲介をしていただき同絵画の発見につながった。同絵画の閲覧・撮影にあたっては株式会社三楽の大西英和氏にお世話になった。株式会社三楽代表取締役社長・公益財団法人有隣会代表理事の虫明優氏には閲覧・撮影にかかわるご配慮をいた

だった。同絵画については大原美術館の塚本貴之学芸員（作品保存・管理）に作品調査をしていただき、実見のために倉敷を訪問した際は本誌掲載用に撮影していただいた。研究所が贈呈したとおぼしき肖像画の現物を倉敷で確認し、研究所の年史に記されていなかった欠落を埋めることができた。倉敷の関係者からいただいた多大なご協力に御礼を申し上げる。

研究所が所蔵している矢崎千代二の作品については、横田香世氏による作品熟覧と同伴された降旗千賀子氏（元目黒区美術館学芸員）の知見から学びを得て、今回の絵画資料の修復・手当てにつながった。高野岩三郎と矢崎千代二の合作《大阪新開地》は飯田直樹氏（大阪歴史博物館学芸員）からいただいた情報提供が本誌掲載横田論文の作品解説につながった。二村一夫名誉研究員には絵画資料の所蔵の経緯や参照すべき記録等を教えていただいた。事務日誌の筆耕は松尾純子兼任研究員によるもので高野日記の読解でも協力を得た。《佐野新田争議》および《小林多喜二の屍？》の作品の検討にあたっては立本絃之兼任研究員から情報提供を受けた。

別表 大原社会問題研究所「事務日誌」における矢崎千代二関連の記述一覧

年	月	日	曜日	記述内容	備考
1933	11	9	木	一、森戸氏高野所長ノ肖像画依頼ノタメ京都へ出張、	
1933	12	1	金	一、矢崎畫伯來訪高野所長ノ肖像畫ヲ描ク	
1933	12	22	金	一、高野博士還曆祝賀会ヲ三、四月頃東京ニ於テ開ク考へ 同時ニ大阪ニ於テモ所長ノ還曆祝賀ヲ兼創立記念講演会ノ如キモノヲヤル考へ 一、還曆祝賀記念資金募集委員ヨリ寄贈ノ祝賀記念寄附金ニテ矢崎画伯ニ依頼シ肖像画二枚ヲ作成贈呈スルコト、ス、	
1934	1	9	火	一、矢崎千代氏ヨリパステル画壺枚寄贈アリ（石原氏経営南洋ノ鉦山写生）森戸氏ヨリ禮状ヲ出ス（マレー半島ジョホール王国石原鉄山ノ図）	千代はママ。下線を付した記述は赤鉛筆で別筆跡の加筆。
1934	2	17	土	一、午後一時矢崎画伯來所所長ノ肖像画ヲ描ク 揮毫料所長ノ一枚分一〇〇、〇〇故高田ノ分三〇、〇〇計一三〇、〇〇ヲ渡ス、	高田とは高田慎吾。1927（昭和2）年7月5日に死去（典拠：「事務日誌」同日条。以下別記なければ同様）。
1934	4	9	月	一、木村君大阪港碇泊クライド丸ニ出向キ矢崎畫伯ノ委託品高野所長宛ノパステル画一枚受取ル	木村とは、1930（昭和5）年4月21日に資料室事務員として採用された木村定。
1934	4	16	月	一、高野博士還曆祝賀会ヲ大阪俱樂部ニテ開催午後七時一九時、出席者五十八名	
1934	4	17	火	一、所長高野博士還曆祝賀記念学術大講演会ヲ午後七時一十時半迄朝日會館ニ於テ開會、	
1934	4	25	水	一、故高田氏肖像画揮毫料三〇、〇〇支拂（矢崎画伯拂）	
1934	6	9	土	一、中村君大阪港碇泊クライド丸ニ出向キ矢崎画伯委託故高田氏ノ肖像画一枚受取ル、	中村とは、1933（昭和8）年6月12日に事務として採用された中村勲男。
1935	4	17	水	一、矢崎畫伯來訪、高田、榊田両氏ノ肖像畫持參セラル、全畫伯作品繪ハガキ多数寄贈セラル、	榊田とは榊田民藏。1934（昭和9）年11月5日に死去（典拠：「事務日誌」同月6日条）。
1936	9	29	火	一、大原氏肖像画揮毫ノタメ矢崎画伯ヲ住吉ノ大原邸へ案内ス（鷹津）	鷹津とは鷹津繁義。研究所創立まもなく庶務主任として就任（典拠：『100年史』25頁）。
1936	10	22	木	一、大原氏肖像画揮毫ノタメ鷹津矢崎画伯ヲ住吉ノ大原氏別邸へ案内ス	
1936	10	30	金	一、矢崎氏ニ大原氏肖像画二面揮毫謝禮トシテ金貳百圓ヲ贈ル（共済基金）	
1937	2	15	月	一、感謝並ニ留別晚餐会ヲ午後六時ヨリ新大阪ホテルニ於テ開ク來会者三十三名、席上ニテ大原氏ニ肖像画ヲ贈呈ス、	

注)・年月日について、事務日誌では元号で表記されているが、西暦に変更した。

・原文は縦書きで、万年筆を使用している。年月日は押印で漢数字で記入されている。

・「一〇〇、〇〇」は、100円00銭と解される。

作成) 松尾純子・法政大学大原社会問題研究所兼任研究員

修復・手当での記録

大原社会問題研究所蔵絵画資料修復報告（有限会社 修復研究所二十一 田中智恵子）

法政大学大原社会問題研究所蔵絵画資料 11 点の修復及び額装処置を行った。本報告では、主に修復作業を行った 3 作品について紹介する。

- (1) 作者 : 不詳
作品名 : 小林多喜二屍？
制作年 : 不明
材 料 : コンテ、洋紙
寸法(mm) : 295×379

修復前の所見

厚み 0.25 mm 程度の茶色の洋紙を使用している。経年による劣化がある。四隅は台紙に接着されている。上辺・下辺付近に、天地方向の緩やかな波打状の変形が生じている。上辺中央の右側に小さな破れがある。台紙はベニヤ板に洋紙を貼り、周縁部はテープで縁貼りされているが、経年劣化により殆ど外れている。裏面のベニヤ板には中央上部に二箇所穴が開けられ、ビニール紐が通されている。

修復処置

1. 写真撮影・調査

修復前の撮影、作品の状態調査を行った（図 1, 2, 3）。

2. 旧処置除去

本紙が四隅 4 点で貼られていた褐色の洋紙の周囲を切り取り、画面を下にして裏面の接着されていない箇所を切り離しながら外していった（図 4）。四隅に残った接着痕は、褐色の紙が残っている箇所はメスを用いて削り、接着剤が残っている箇所は、精製水を含ませた綿棒で僅かに加湿して、接着剤が軟らかくなったところで除去した。

3. 破損部接着

上辺右側にある破損箇所にもチルセルロースを筆で差し入れて接着し、ポリエステル紙と吸い取り紙を当てて重しを置いて乾燥させた（図 5, 6）。次に裏面側からも同様に接着した。

4. 乾式洗浄

画面側の周縁部のみ、練り消しゴムを用いて軽くクリーニングした（図 7）。

5. 写真撮影

修復後の状態を撮影記録した（図 8, 9）。

6. マット装

和紙ヒンジとチルセルロースを用いて、ベースマットに作品を固定した（図 10, 11）。Book 型のマットには画面保護用のフラップ（マット紙）を取り付けた（図 11）。Book 型マットを立てた状態で収納できる中性紙保存箱を新調した（図 12）。

修復後の所見

旧台紙除去により、裏面の人物素描が発見された（図 9）。



図 1 不詳「小林多喜二屍？」修復前 表



図 2 修復前 側光線（左）

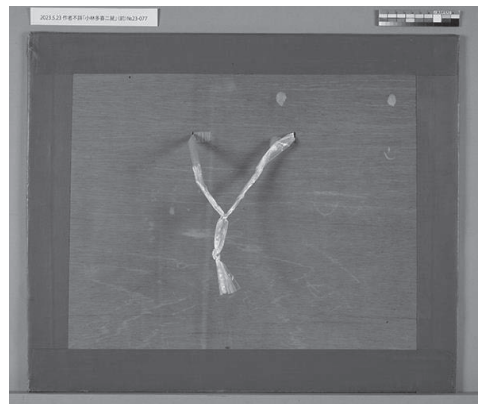


図 3 修復前 裏

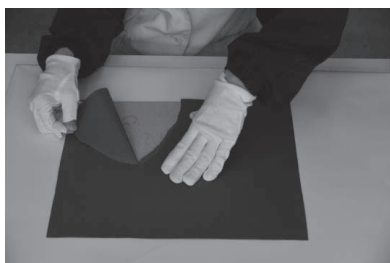


図4 修復中 台紙除去



図5 修復中 破損部接着



図6 修復中 破損部接着 (プレス)



図7 修復中 乾式洗浄



図8 修復後 表

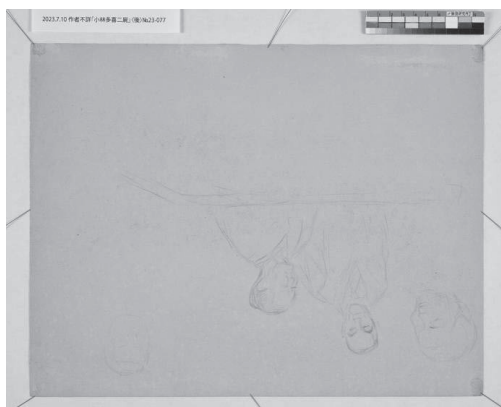


図9 修復後 裏

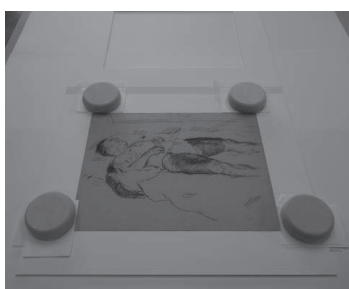


図10 マット装
上辺両端と左右辺の下端、計4箇所を和紙ヒンジで固定した。

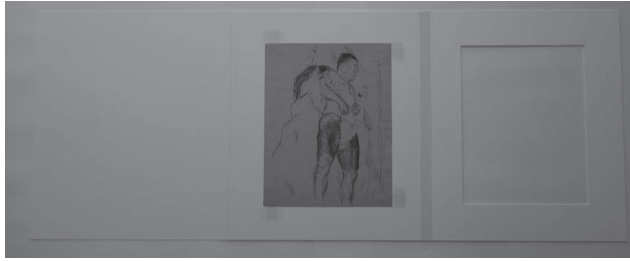


図 11 マット装
右側のウィンドウマットを被せ、その上に左側の保護マットを重ねて収納する。

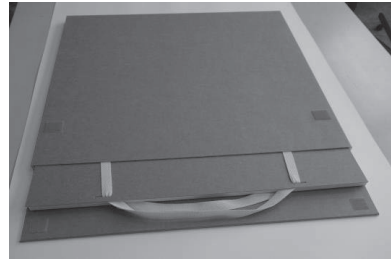


図 12 中性紙保存箱

- (2) 作者 : 矢崎千代二
 作品名 : 高野岩三郎肖像
 制作年 : 1934年
 材料 : パステル、洋紙
 寸法(mm) : 608×460

修復前の所見

厚み 1mm 程度の茶色の厚紙を使用している。経年による劣化がある。上辺付近で、本紙の一部が左右方向に細長く切断されており、この切断箇所を表側と裏側から紙を貼って接着している。裏面の破損口はやや開いている。中央部左右方向に折れ跡がある。右辺に小さな破れが散在する。左上角は紙の層間剥離が生じている。

人物の頬や右腕部分に、カビの付着が見られる。上辺部の補強紙の上から、パステルで補彩されている。左下にサインがあるが、褪色が認められる。

修復処置

1. 写真撮影・調査

修復前の撮影、作品の状態調査を行った(図 13, 14)。

2. 破損部接着

周縁部の小さな破損箇所を、メチルセルロースを用いて接着した(図 15)。上辺部の旧接着箇所については、裏面の破損口がやや開いていたため、裏面より和紙を貼って補強した(図 19)。接着剤はメチルセルロースを使用した。

3. 乾式洗浄

裏面のみ、粉末消しゴムと刷毛を用いて軽くクリーニングした(図 16, 17)。

4. 写真撮影

修復後の状態を撮影記録した(図 18, 19)。

5. マット装

和紙ヒンジとメチルセルロースを用いて、ベースマットに作品を固定した。Book 型のマットには画面保護用のフラップ(マット紙)を取り付けた(図 20, 21)。Book 型マットを立てた状態で収納できる中性紙保存箱を新調した(図 22)。

修復後の所見

マット装と保存箱を新調したことにより、安定した保存環境となった。

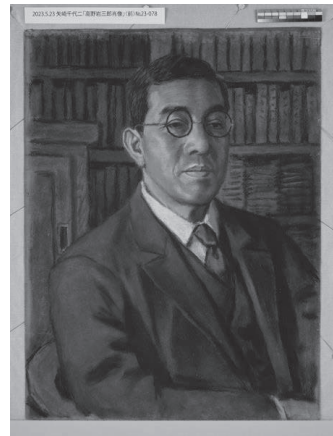


図 13 矢崎千代二「高野岩三郎肖像」
修復前 表

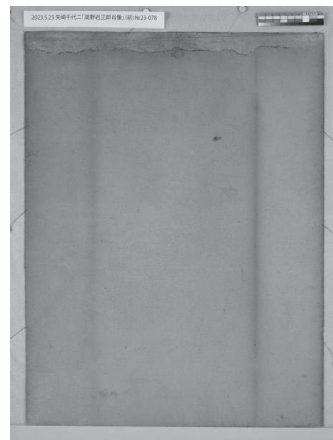


図 14 修復前 裏



図 15 破損部接着

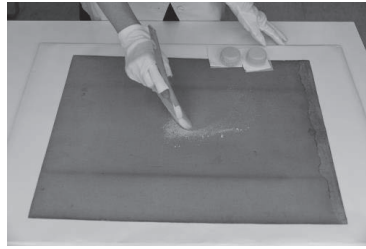


図 16 乾式洗浄



図 17 乾式洗浄後の粉末消しゴム (左)
使用前の粉末消しゴム (右)

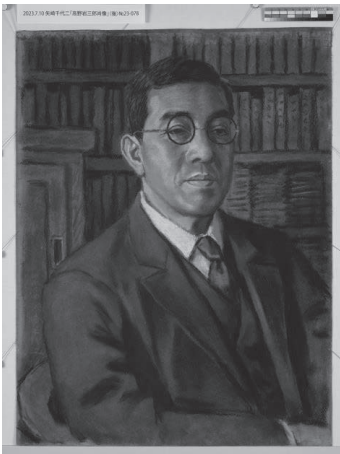


図 18 修復後 表

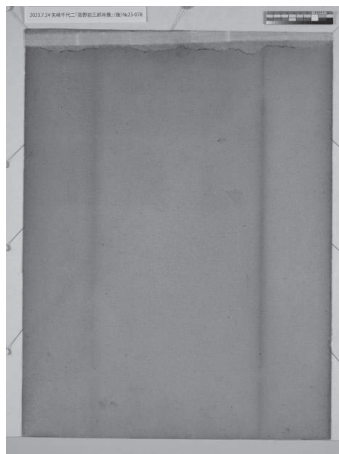


図 19 修復後 裏

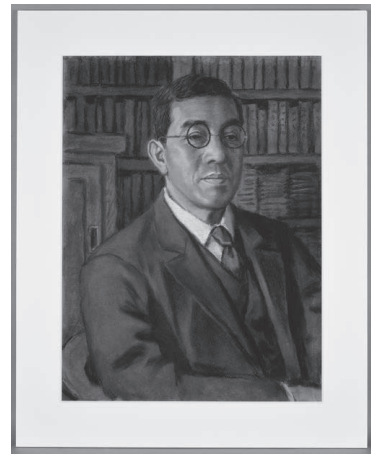


図 20 マット装後 表

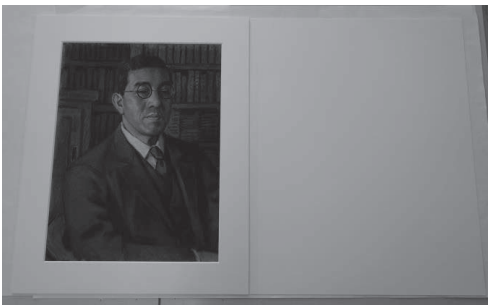


図 21 マット装後
右側の保護マットを画面側に被せて収納する。

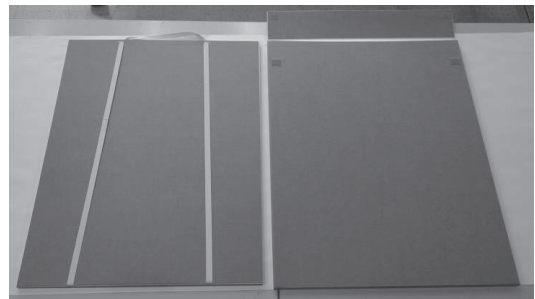


図 22 中性紙保存箱

- (3) 作者 : 高野岩三郎・矢崎千代二
 作品名 : 大阪新開地
 制作年 : 昭和13年(1938)
 材料 : パステル, 水性絵具, 洋紙
 寸法(mm) : 601×901

修復前の所見

厚み0.4mm程度の茶色の洋紙を使用している。経年による劣化がある。上辺の左右端と下辺の裏面に帯状の紙が貼られている。裏面は全体に汚れており、緑色や黄色などが部分的に付着している。右辺下側に左右方向の破れがある。

描画には水性の絵具とパステルを併用している。

額縁は経年劣化により、石膏のレリーフ部分に浮き上がり剥落が生じている。厚み6mmの合板で裏蓋として用いられている。裏蓋は3層構造の合板で、経年劣化により周縁部に層間剥離が生じていた。裏面に裏書きがある。旧処置により本紙と間紙と裏蓋は、厚手のマイラーシートで包まれた状態で額入れされている。

修復処置

1. 写真撮影・調査

修復前の撮影、作品の状態調査を行った(図23~27)。

2. 旧処置除去

裏面上辺の左右端と下辺部に貼られた帯状の紙を、ピンセットを用いて除去した(図28)。

3. 破損部接着

まず画面側から、右辺下側にある破損箇所にもチルセルロースを筆で差し入れて接着し、ポリエステル紙と吸い取り紙を当てて重しをおいて乾燥させた(図29)。

次に裏面側からも同様に接着後、周縁部を食い裂きにした和紙を接着して補強した(図31, 32)。

4. 乾式洗浄

裏面のみ練り消しゴムを用いて、圧力をかけないように注意しながら全体に軽くクリーニングした(図30, 31)。

5. 写真撮影

修復後の状態を撮影記録した(図33, 34)。

6. 額装

既存の額縁は経年劣化が著しいため、額縁を新調した(図35, 36)。画面保護のため、低反射・紫外線防止・帯電防止アクリルを取り付けた。

作品は新調したベスマットに和紙ヒンジとメチルセルロースを用いて固定した。

旧裏蓋は周縁部を紙テープで縁貼りしてから額縁へ納めた(図36)。

修復後の所見

修復前はマイラーシートで包まれた状態であったが、今回額縁を新調したことにより、鑑賞しやすい画面となった。

全体に緩やかな支持体の波打変形が生じているが、パステル画面に負担をかけるため、変形修正処置はあえて行わなかった。また所蔵館の資料としての位置づけを考慮し、補彩などの復元処置は行わなかった。



図23 高野岩三郎・矢崎千代二「大阪新開地」
修復前 額装 表

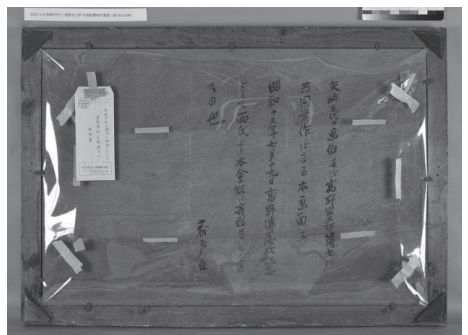


図24 修復前 額装 裏



図25 修復前 表

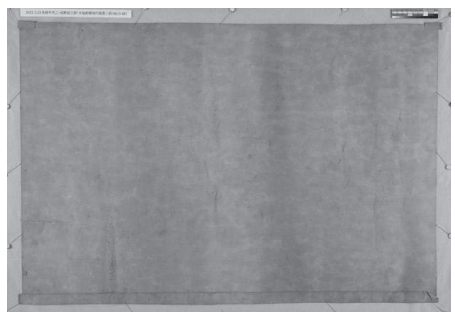


図26 修復前 裏



图 27 修復前 側光線 (左)

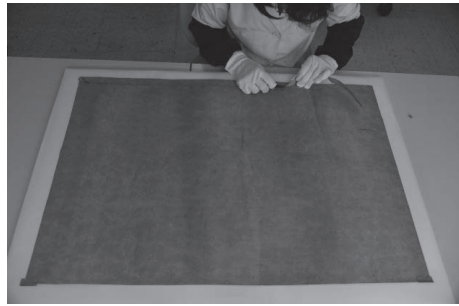


图 28 修復中 旧処置除去



图 29 修復中 破損部接着

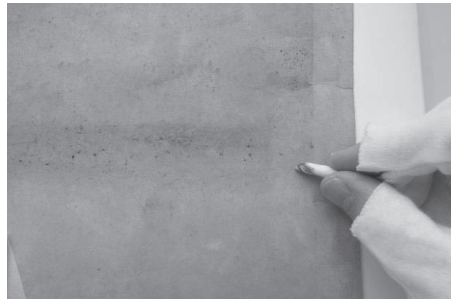


图 30 修復中 乾式洗浄

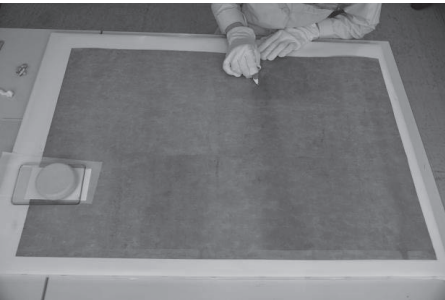


图 31 修復中 乾式洗浄・破損部接着

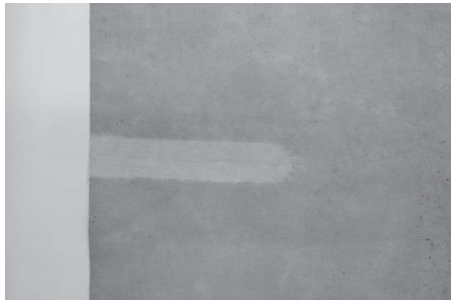


图 32 修復中 破損部補強

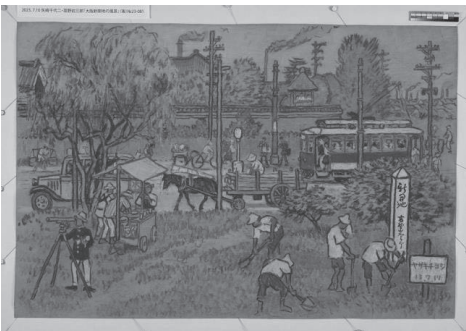


图 33 修復後 表

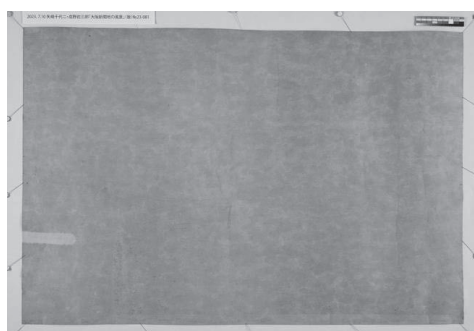


图 34 修復後 裏

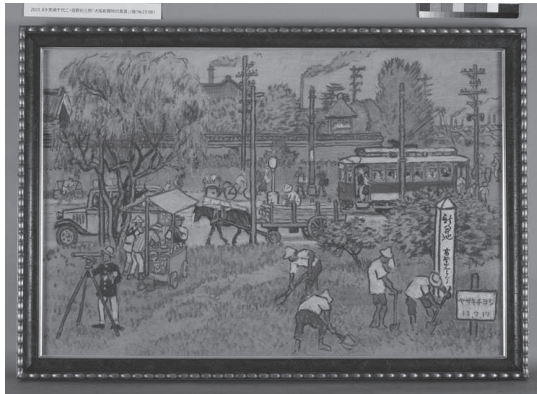


図 35 修復後 額装 表

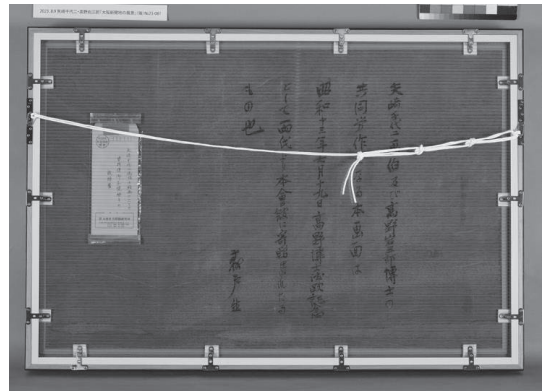


図 36 修復後 額装 裏

上記以外の作品については、処置内容のみ記載する。



作者：鈴木三郎
 作品名：「佐野新田争議」
 材料：油絵具，スケッチ板
 画面寸法(mm)：330×238

処置内容：
 額縁改修（欠損部の充填及び補彩，入れ子の調整，ステンレス製吊り金具・ステンレス製トンボ・吊り紐・裏蓋新調）
 段ボール差し箱・黄袋の新調

図 37 修復後 額装 表



作者：矢崎千代二
 作品名：「高野房太郎肖像」
 材料：パステル，洋紙
 画面寸法(mm)：454×331

処置内容：
 額縁改修（スペーサーとベースマット新調。画面がガラス面に触れないようにした。ステンレス製吊り金具・吊り紐・裏蓋の新調）
 段ボール差し箱・黄袋の新調
 作品固定（和紙ヒンジとメチルセルロースを用いた。）

図 38 修復後 額装 表



作者：矢崎千代二
 作品名：「高田慎吾肖像」
 材料：パステル，洋紙
 画面寸法(mm)：453×333

処置内容：
 額縁改修（低反射・紫外線防止・帯電防止アクリル新調。スペーサーとベースマット新調。ステンレス製吊り金具・吊り紐・裏蓋新調）
 旧裏蓋の乾式洗浄
 作品固定（和紙ヒンジとメチルセルロースを用いた。）

図 39 修復後 額装 表



作者：矢崎千代二
作品名：「榎田民蔵肖像」
材料：パステル，洋紙
画面寸法(mm)：453×333

処置内容：
額縁改修（低反射・紫外線防止・帯電防止
アクリル新調。スペーサーとベースマッ
ト新調。ステンレス製吊り金具・吊り紐・
裏蓋・ステンレス製トンボ新調）
作品固定（和紙ヒンジとメチルセルロー
スを用いた。）

図 40 修復後 額装 表



作者：矢崎千代二
作品名：「大原孫三郎肖像」
材料：パステル，洋紙
画面寸法(mm)：608×458

処置内容：
額縁改修（低反射・紫外線防止・帯電防止
アクリル新調。Book型マット新調。緩衝
材・裏蓋新調）
作品固定（和紙ヒンジとメチルセルロー
スを用いた。）

図 41 修復後 額装 表



作者：矢崎千代二
作品名：「高野岩三郎肖像」
材料：パステル，洋紙
画面寸法(mm)：611×453

処置内容：
額縁改修（低反射・紫外線防止・帯電防止
アクリル新調。Book型マット新調。緩衝
材・裏蓋新調）
作品固定（和紙ヒンジとメチルセルロー
スを用いた。）

図 42 修復後 額装 表



作者：村上桃二
作品名：「森戸辰男肖像」
材料：油絵具，画布
画面寸法(mm)：530×455

処置内容：
額縁改修（紫外線防止アクリル新調。入れ
子の固定。ステンレス製吊り金具・吊り紐・
ステンレス製トンボ新調）

図 43 修復後 額装 表



作者：中村哲
作品名：「久留間鮫造肖像」
材料：油絵具，画布
画面寸法(mm)：454×380

処置内容：
額縁改修（紫外線防止アクリル新調。ステン
レス製吊り金具・吊り紐・ステンレス製トン
ボ新調）

図 44 修復後 額装 表

全体所見

大原社会問題研究所所蔵の矢崎千代二による肖像画（「高野岩三郎肖像」2点、「高野房太郎肖像」、「高田慎吾肖像」、「榎田民蔵肖像」「大原孫三郎肖像」）に共通する特徴として、人物の唇の不自然な白さがある。おそらくこの部分に用いられた赤色レーキ顔料の褪色によるものと考えられる。

今回の紫外線防止アクリルの設置により、今後の紫外線による影響については改善された。依頼内容にガラスを紫外線防止のものに交換することが挙げられていたパステル画作品については、弊社の判断により、帯電防止効果のある低反射・紫外線防止アクリルを用いた。

矢崎千代二はフィキサチーフを自製して用いていたという¹。今回取り扱った作品は、ある程度は定着されているが、どの作品も触れば必ず僅かながらパステル粉末が取れてくるため、作業内容を検討し、必要最小限の処置を行うに留めた。

¹ 横田香世『パステル画家矢崎千代二——風景の鼓動を写す』思文閣出版、2023年、367頁。